

事業の実績

◆事業のねらい

ベネッセ総合教育研究所の調査によると、大学1年生の約60%が退学・転学の意向があるとされ、これは新1年生の大半が不本意入学生である可能性を示唆している。また、大学適応にはできるだけ早期にそのきっかけを提供することが重要であるとされている。本プロジェクトはこれらの点にアプローチするために取り組んだものであり、入学初日に新入生の緊張を解し、期待感を高めることで大学適応を促すことを狙いとしている。

また、在学生在が企画に取り組むことで、彼らに活躍の場を提供でき、組織的に協働するプロセスを体験することも大きな目的の一つとしている。

◆プロジェクトの進行

①ミーティング

2016年9月末よりメンバーを募集し、14名の学生が参加を希望した。10月19日に第1回のミーティングを行い、以後、毎週火曜日の18時から90分と毎週木曜日の昼休みの週2回のミーティングを毎週行った。定期試験期間を除き、合計25回の定例ミーティングとそれ以外にも随時随時のミーティングを行い、企画を検討した。

②集団形成

基本的に初対面同士の学生の集まりであるため、プロジェクト開始序盤は企画のための意見集約と並行して集団形成を行うことが重要となる。序盤はアイスブレイクに力点を置いて集団形成を促すことに力点を置いていた。

企画立案作業は、新入生が大学に対してモチベーションを上げるためには「大学の楽しいところ」を伝えることが重要であると考えたため、在学生の視点から捉えた「大学の好きなおところ」をKJ法により集約し、セレモニーの具体的なテーマ設定のための作業から始めた。10月～12月の間は、職員によるファシリテーションを軸に、学生が交代しながらファシリテーターを行い、メンバーの意見を集約しセレモニーのテーマや枠組みを決めていった。

③学生による企画立案

セレモニーのテーマ、プログラムの大方の枠組みが決まってからは、学生のみでの企画立案作業に移った。学生の代表、副代表を決め、どのように運営していくかを職員と相談しながら進めていく。これ以降は、学生が自律的な集団としての自覚を持ちながら企画立案作業を進めていった。会議の運営や、本番までの段取りほか、学生代表や副代表と職員で協議しながら進めるが、職員が直接的にアイデアを出すことは控えた。職員は学長や学部への報告や説明を行い、学生と大学との間に立ち調整することを主として動いていた。

④実施準備～本番

定期試験期間後は、授業がない中定例ミーティングを行うと同時に、自主的に学生がそれぞれの担当ごとに集まるなどし、職員から提示されている予算や会場の設備などの制約事項とすり合わせながら企画の細部を詰める作業を行った。本番が近づく3月には脚本作りや映像制作、演出の検証、小道具の準備など、役割分担を行った上でセレモニーの開催に向けて具体的な作業を行った。本番直前にはリハーサルを行い、不安な点の一つずつ解消する努力をしていた。すべての分野で職員が監修したが、ここでも学生の自主性を尊重し、職員は基本的には助言に徹した。この頃は学生集団もチームとして成熟し、就職活動で3年生の欠席が増える状況においても、自律的な組織としてメンバー間で相互に役割を補完しながらプロジェクトの目的を果たす姿勢が認められた。

4月1日に入学式典後に新入生歓迎セレモニーが開催され、無事に終了した。

◆セレモニーの概要

テーマを「学生が作るクマガクライフ—My sweet university—」とし、大学全体を一つの家として捉え、学生同士がキャンパスライフをともに楽しみ、寄り添いあって過ごすアットホームな雰囲気を伝えることに重点を置いた。そのため過去2回において行われた新入生同士のゲームを実施するのではなく、在在学生にとっての「クマガクの好きなおところ」を実際の活躍する学生の紹介や出し物を通じて、大学や学生の雰囲気を表現した。また、充実した大学生活を送るためには主体的に動くことが重要となることが伝わるように、大学のリソースを使って活躍する在学生の姿を紹介するように注意を払った。

時間は入学式典後の11:00～11:30であり、ダンスのパフォーマンス、手作りの大学紹介VTR、VTRと連動した学生紹介、新入生全体で参加できるイベントなど、ストーリー性を意識して企画した。

概要については別紙のとおり。

具体的な成果

◆新入生への影響

4月18日～5月19日にかけて、新入生に対してセレモニーに関するアンケートを実施した。（回答数533名）セレモニー全体としての印象は「とても良かった」が36%、「良かった」が52.5%と約90%の学生が好印象を持ったことがわかる。その他のプログラムも、すべて80%以上の新入生が好印象を持っており、セレモニー全体を通じて良い評価であったことが分かった。

セレモニーの目的である、新入生の大学生活への期待とモチベーションについては次の通りであった。

①大学生活への期待

セレモニーに参加したことによって大学でやりたいことがみつきりそうかという質問に対して、72%の新入生が肯定的な回答をしている。特に、「みつかった」と回答した割合は11%であり、その後の大学生活をどのように過ごすかといったイメージを、新入生がある程度持つことができたのではないかと推察する。「みつけれられる可能性を感じた」と回答した割合は60.9%であり、具体的なビジョンまでは描けないまでも、一定程度大学生活に期待を持つことができたものと捉えることができる。

一方で、「あまり感じなかった（8.6%）」「わからない（16.1%）」との回答も一定の割合であり、約25%の新入生からは肯定的な回答を得られなかった。また、目的意識をもって入学してきた学生は少数であることがわかった。

②モチベーション等

大学生活への意欲への影響についての質問に対しては、23.4%の新入生が「とても向上した」と答えており、自由記述についても極めて肯定的なコメントが多かった。「どちらかと言えば向上した」は55.9%であり、約80%の新入生が意欲を高めた状態でその後の学生生活に臨むことができたようだった。セレモニーに参加して意欲が低下した新入生はいなかった。「大学生活への不安が拭えた」とのコメントもあり緊張感を解す時間にもなったようだ。「先輩達が作ってくれた」ことに対する喜びのコメントもあり、在学生在が創る意義をあらためて確認できた。

◆在学生への影響

プロジェクトメンバーに対しても、約半年間のプロジェクトを振り返って記述式のアンケートを実施した。セレモニーが成功だと感じるという問いには、全員が成功だったと感じているようだった。理由としては大きく2点に分けられる。1点は新入生の満足そうな雰囲気を感じていたこと、キャンパス内で新入生から声をかけられたり、セレモニー内で紹介したサークルに入会希望者が殺到していたりする様子から、成功と感じていたようだった。2点目は、彼ら自身の満足度の高さがそのまま成功と捉えている点であった。スムーズに進行できたことそのものを成功と捉えているものであった。これらの理由を併せて成功と捉えている学生もいた。

①プロジェクトから学んだこと

メンバー大半が、組織として物事を作っていくプロセスに関することを学んだこととして挙げている。特に、ファシリテーションやコミュニケーションに関することについて学ぶことができたと感じる学生が大半であったようだ。具体的には、自らの意見の発信や、他者の意見の引き出し方やその調整の仕方、情報共有について挙げている。他者の考えを推し量り配慮することの重要性和その手段について学んだという学生もいた。

②メンバーの満足度等

メンバーの満足度や達成感は極めて高かった。代表・副代表といったポストに就いているか否かに関わらず、出席率や準備への参加の度合いに比例して、満足度が高い傾向にあるようだった。また、プロジェクトを通じて交友関係が広がったこと、特にメンバー間の連帯意識の高さも充実感に繋がっているようだった。

◆まとめ

以上のとおり、アンケートの結果からは冒頭に挙げた目的は、概ね達成できたのではないかと考える。新入生が、サークル勧誘期間中、セレモニー中で紹介したブラスバンド部やダンス部、アイスホッケー部のブースに多く訪れたとの報告もあった。一方で、プロジェクトメンバーに関しては、本プロジェクト以外にも積極的に大学のイベントに関与する機会が多く、現在でも大学の活性化に寄与してくれている。

プロジェクトメンバー・新入生の双方に良い効果があったと言える。学生の意見を引き出し、まとめ、形にしてアウトプットすることで、大学の活性化につなげることができるものと考えられる。

(吉田)